

# 支那社會生活の性向

— 教育的角度よりの一考察 —

## 目次

一 はしがき	1
二 研究課題と方法	3
三 史的資料の考察	11
1 支那原始社会時代の教育	11
2 封建時代の開始と西周の教育	15
3 春秋戦国時代と教育学説の勃興	20
イ 道家	
ロ 儒家	
ハ 墨子	
ニ 法家	

三	支那社会生活の性向の見透し	33
四	見透しの文献的再検討	46
1	社会的特異性	47
2	文化的特異性	50
3	民族的特異性	56
4	支那性格の統一性	64
五	支那の型的性向の構造	66
六	支那の型的性向の進歩性	72
	重要参考文献	86

は し が き

支那社会の性格を理解すると云ふことは只單に通俗的な好奇心を満し、或は學問的な興味を得心さすばかりでなく、支那と協力して東亜の新世界の建設に邁進してゐる我國にとつて甚だ肝要なことであらう。また二次的にはあるが支那との對比によつて我國自体の社会的性格の理解を助けることも少くないと思ふ。これら學術上の興味、實際上の要求から近來この方面の研究が漸次進められ、進むと共にこの課題の解答が容易でないことが明かになつて來たやうである。それには種々な原因理由もあらうが、今後研究が進められるにつれて詳かにされると期待してよいであらう。本研究がこのやうな充ちた理解への一歩でも近かつけることの役目を畢すならばこの研究の本懐である。



## 一、研究課題と方法

東洋文庫

支那の社会はその存続発展の過程に於て他のいづれの社会にも共通な諸点をもつてゐるが、それと同時に支那の社会に独特な特異点をもつてゐると思ふ。この仮定の下に発足して支那社会の特異性の種々相を検討し、このやうな諸特異性を現はすに至つた支那社会生活の基本的な性向を教育的角度から把持しやうとするのが本研究の課題である。

この課題の研究にさきだつて課題の前提条件である社会と教育との関係、その歴史性等を明かにし、また採用した研究の方法を述べ、この研究の立場及方向を一應きめておきたいと思ふ。

3  
社会がある所に教育は必ず行はれるのである。人が二人以上共に生活すれば人の行動、感情、思考は互に影響し合ふのである。このことは人が好むと否とに拘らず、また意識すると否とに関係なく成起するのである。人が社会生活を営むことによつて互に影響しあふこの事實は廣い意味での教育と云へやう。であるから広義の教育は人類が地球上に棲息し始めた時からあつたと想像してよ

い。けれども文化の進歩につれてこの無意識的な教育は漸次意識して行はれ、計画してなされるやうになり、現代的な意味での教育、意識的・計画的に人を影響する教育が始まるのである。

この事実によりて伺ひ得られることは、教育の事実が存在するには少なくとも三つの条件を必要とすることである。即ち (一) 人が他の人の影響を受け得ると云ふ被教育性或は可塑性を人がもつこと。(二) 人が互に影響しあふ契機となりまた場所となる社会(学校をも含めて)。(三) 教育の内容となる文化或は文化財である。このうちのいづれの条件を缺いても教育の事實は存し得ないのである。事実、教育存在の三条件を可塑性、社会、文化財としたが、これは思考上の分離であつて教育の事實に於て三条件は不可離な一体関係に於て存在してゐるのである。これは教育の事實が社会生活の一現象であることから当然のことである。社会生活は人、社会の全体的統一関係において成起するものであり、その一活動として教育の事實が存するからである。

教育の事實は人の可塑性、社会、文化財の不可離の關係において成立するのであるから、教育的角度から支那社会生活の性向を観ると云ふことは、支那人の性格、支那文化の性格と各別個の研究でなく、この三方面の性格の相互の關係を明かにし、また、これを統一する如き支那社会生活の性向を求めることである。言ひかへれば、支那社会生活の性向の全体をその一部である教育の事實に接する面から伺ふとの意に外ならないのである。

この教育の事實の面に接すると云ふことは、また、発展する面に接するとの意味を含んでゐる。教育の事實は前述の三条件によつて説明はできるが、教育の中心的関心はこの三条件を具へた教育の事實が如何なる姿に発展して、如何なる状態にあるか、また、如何なる方向に発展することか、できるかである。このやうに教育の性質自体のうちに生成発展と云ふことを包含してゐるのであるから、教育的角度よりの考察とは発生的及発展的或は歴史的に研究することを意味するのである。そして社会生活は教育現象が生成発展する場であり、また、歴史の保持者であるから、発展的に見るには社会生活の発展に関連して考察することになる。

5 社会生活発展の階段はこれを理論的に展開することができる。社会生活の創始は血縁である。一組の男女を契機として血縁につながる集團生活である。血

縁による小集團生活は地縁関係の制約をつけながら、民族的な大集團生活へと発展して行く。民族的集團は無意識的存在的社會であるが、やがて意識的發展的社會となり、自然的民族生活は利益、文化、法律を中心とする文化的民族生活に進む。社会生活の様式制度、秩序の確立にともなひ、また他の社會との交渉の進展につれて、社會はその成員を包含しつゝ、その總計とは別に存する實體具體に對する實體としての社會の存在を明確にし始める。それについて社會は血縁と地縁、自然と文化、個人と社會を各々意識的に総合する如き社会生活に進み、社會の完全な單位としての民族國家、或は現代的な意味における國家の全貌を現はすのである。更に完全な社会單位としての國家を數個包括する地縁的世界、さては地上のすべての國家をその單位として成立する人類的世界の可能性が考へられる。更にまた、地縁的世界と人類的世界を矛盾撞着なく統合發展さす神の國とも云ふべき理想世界にまで國家の關係を發展さす希望を持ち得るのである。

以上は筆者が理論的に思索した社会生活發展の一つの理論であつて、個々の社会生活はその社會の特殊性を有しながらも、このやうな一般的な發展をなす。またこのやうな理論的發展の線にそひ下らも各々の社會は独自の具體的發展をなすのである。(事實、一般的な社会發展の理論は独自性をもつ各個の社会生活の發展を検討してそこに觀取できる發展の理を抽象思索して一般論を立てたと云ふ向きが多分に存してゐるのである。)かくて支那の社会生活は人類の社会生活に一般共通な發展をなすと同時にその發展は支那獨特の姿をとるのである。そして、その特殊性のために支那社會は他の社會と區別して考へられるのである。支那の社會を支那の社會としたこの特殊性の発見がこの研究の出発点である。

この特殊性は或時代に限られたものもあり、また各時代を通じて見られるものもあらう。この場合に前者は偶然的なもの、後者は本質的なものとみなしてよいと思ふ。そしてこの本質的な特殊性を現すに至つた支那社会生活の基本的な性格を見出すことがこの研究の終結点である。この窮極的な性格を個々異なる性格と區別して「性向」と稱する事にした。さればこの研究で性向とは社会生活の不易の本質であり乍ら異なつた表現をとる社会生活のあり方を指すのである。支那社会生活の性向とは支那社會の生活の仕方なのであるから、教育が

らも伺はれるのである。教育は社会が生活の活動発展をなす過程に成起する一つの社会現象であるから社会生活の性向を伺ふのに適切な手がかりであると思ふ。

教育的角度から、或は歴史的発展のうち支那社会生活の特異な性向を検出するのに、大体三つの方法が考へられる。その一つは支那社会生活の発展のさまを他の社会或は数個の社会のそれと比較検討して支那の特異な性向をおのづから明瞭ならしめる。言はゞ比較性向学的方法である。これは特異な性向を指摘するに高度の正確さが期待でき、また特異性を鮮明に描きだすことができる。けれどもこれは甚だ大事業である。数個の社会の歴史に精通した碩学者のとり得る方法であらう。第二の方法は理論的に社会生活発展の類型を思索し、その類型によつて支那の教育事象の発展を検討し、それがいづれの類型に属するかを判断する性向類型学的方法である。この方法は類型の理論的思索が優秀でありまた適切である場合には甚だ捷徑の妙があるが、ともすれば理論的に分類した類型のいづれかに合致させやうとする無理が生ずる。先づ結論があつてそれを支持するやうな資料を蒐集する独断論的な危険を藏してゐるのである。今一

つの方法は、そしてこの研究に用ひやうとする方法は支那社会の変遷発展とともに現はれる教育事象を時代を追つて書き支那の社会に特異と思はれる史実、理論を拾ひ集めるのである。そして集められた諸特異点を通観し、大多数の特異点に共通な傾向を見出し、そこに支那の特異な性向を勘得しやうとするのである。この方法は考察の範囲を支那に制限し得ること、支那の特異性に適切な性向の種類が得られること、この点に於て前の二つの方法に優れてゐる。けれどもこの方法もまた容易ならぬ困難をもつてゐるのである。この方法は資料を蒐集するときに、それが支那に特異であるか否かの見分けが必要であるが、その判断に研究者の主観が介入する危険が多分に存するのである。この意図せぬ主観的判断の誤謬を可及的に僅少にすること、そして次の二つの点が考へられる。(一)発展的に見るに際し教育事象の創始点を慎重に研究することである。創始点の検討が確實であれば、これを據点として時代の推移による変化が明瞭となり、その時代の特異点を可成正確に判断し得られると思ふ。(二)このやうにして判断推定した諸特異点を通観することである。収集された諸特異点を一貫する特異な性向を見透し、それによつて本質的でなかつた特異点を除外訂正し得ると

思ふ。このことは更に次の困難を孕んでゐる。即ち見透しを感得することである。これは最も大切なことであつて、單に特異点の蒐集に注意深いことばかりでなく、ひすまなげ心情とするといふ知性を研究者に要求するのである。この資格の不充分を補ふために性向の見透しを他の文献が明かにするところと照合再検討するつもりである。

## 二 史的資料の考察

### 1 支那原始社会時代の教育（西周以前三五〇〇—一三三三B.C.）

支那の古代文献の高等批評及考古学の科学的研究の近代に於ける進捗につれて支那古代の文化は漸次詳かにされつつある。現在までに明らかにされた資料によれば支那太古の住民は比較的地味の豊かである黄河の流域に住み、数個の異種族からなつてゐた。この原住民は血縁によつて集團生活をなし、年長の女子が首領となる母系制をもつてゐた。狩獵と遊牧とにより生活を立て、毒虫、野獸、天災、水害等の自然の脅威と闘はねばならなかつた。また異種族間の闘争征服は可成頻繁に行なはれたやうである。が、そのうちに漢民族が來り制覇をなすに至つた。

漢民族は凡そ五千年程前に中央アジアの方面から黄河の中流域に移住し、原住民である四圍の蛮族を征服しまたは同化して支那民族の起原をなしたのである。当時の漢民族の文化は原民のそれと大差なかつたらしい。火の使用や簡單な道

現実の處理に關心をもち、その處理の仕方は型的である。型は具體的規範でありこれを繰返すことによつて機械的能率が得られ、宿命的、復古的、実用的な性格を具備してゐる。この意味に於いて支那社会は型的性向をもち、それによつて支那の社会生活の仕方が説明理解できる。

この見透しによつて支那の歴史を再読するならば、これを支持する如き多くの資料を見出すと思ふのであるが、これは他の機会に譲るとし、次にこの見透しが他の文献によつて支持されるかとの考察に進むことにする。

#### 四 見透しの文献的再検討

支那の社会は現実の社会生活に關心を示しそれに対處する社会生活の性向は型的であり復古的、宿命的、実用的性格を現す。この見透しを文献の主なるものと参照しそれを再検討し、如何なる程度までこの見透しが妥当であるかを見またそれによつて今まで明かにせられなかつた見透しの異なつた側面を伺ふことが出来ると思ふ。その便宜上支那社会生活の特異性を社会的文化的民族的の三つに分け順を追つて考察を進めたいと思ふ。

##### 1 社会的特異性

支那の長い歴史を通じて持たれた支那社会の特質としてアジア的停滞性といふことが多くの人によつて唱へられてゐるが、それを來すに至つた支那社会の特異性に關しては研究者の立場の相違により種々の見解が行はれ決定的な共通の理解には達してゐないやうである。

尾崎秀実氏著『現代支那論』の『支那社会の歴史的停滞性』の項によれば支那社会の歴史的特異性はその著しい停滞性の上に置かれた農業社会の内にも求められる。農業社会こそは農業共同体の時代から現代までを貫く支那の本質的な社会であるからである。見方によれば支那の特質はこの農業共同体の変質の過程にあらはれたものといひ得るのである。そして『この変質過程の枢軸をなしたのは支那の家族制度』であるといわれる。農業共同体と家族制との密接な結合が『農業共同体的遺制』となり、その根強い生存に支那の停滞性の原因がある。何故に農村共同体的性質が保存されたかの原因はそれ自体の内部と外部とに存してゐた。内部的には父権制宗族制的構成が結合の紐帯をなしてゐたとの外に支那農業の性質に關係があると思はれる。外部的原因に付ては支那が資本主義



列強の進攻を受けるまでは支那を吸収するに足る強力な社会をまたなかつたことである。と説明されてゐる。

秋沢修二氏著『支那社会の構成』によれば『支那の父家長的デスポティスムが全支那社会及その諸介取構造の根本性格』である。『この父家長制的デスポティスムなるものは勿論一つの政治的支配体制であるが然しそれは單なる政治的上層建築ではなく、むしろ深く直接に社会の経済的・下部構造のうちに喰ひ入つてゐり、支那社会の余経済生活を直接的にとらへこれを握つて居るのである』(二五頁) 人工灌漑に基づく零細農耕、農村共同体の双隸的乃至封建制的変態とは父家長制デスポティスムを有効に行ふために利用されたのである。この利用された諸條件は支那の独自の社会の形成に重要ではあるが、これは條件であるに過ぎず支那型デスポティスムを必然に結果させるとは限らない。このことを繰返し述べられてゐる。かくて父家長制的専制を支那社会の根本的性格とせられ、支那の『史的停滞性』のみならず支那の精神的・物質的の生活及文化を説明せんと試みられた。而してこの父家長的専制の生じた理由は、『子が親に対して家族が父に対してすべて双隸的である関係』に基いてゐるのである』(四

九頁)とされてゐる。

歴史的停滞性は支那社会の恒久性をどのうちに包含してゐるが、この点に關し湯良禮氏はその著『支那社会の組織と展望』(邦訳)において『支那史と他の文明史との差異は支那社会の比類なき恒久性と支那国民の永續性である。これは大部分家族制度と儀式が周礼の時代から行はれて居たと云ふ伝統的崇拜による』(四一頁)とされた。

以上三氏の説かれる處は社会の性格と社会の環境は互に異なつた立場をとられてゐる。尾崎実秀氏は社会の特質を認め乍ら環境の力を重く見られ、これに對し秋沢修二氏は社会の性格を根本的のものとしこれによつて環境を作りまた支配するとの見解をとられ、湯良礼氏は大体前西氏の中間的な立場を採られてゐるやうである。この性格構成の要因に關する意見の相違については漸くこれを論ぜないこととし、またその述べられた特異性をそのまゝ受容するとして、その特異性を型的性向との見透しに關聯して考察を進めよう。尾崎実秀氏が支那社会の特質とされる『農村共同体的遺制』の根強い生存とは型的性向の復古的性格、即ち現実の社会の発展階段は無關係に創始的な社会関係を固持するこ

とと解せられないであらうか。秋山修二氏は支那社会の根本性格を父家長的專制とし、その源を父と子及家族との関係が專制奴隸的であることに求められてゐる。これは家長である父がきめたことはそのことの如何に拘らず家族の成眞はこれに無條件に服従し無批判に尊奉することと解釈でき、これは型的性向の宿命の性格の現はれと見られないであらうか。湯良禮氏は傳統に対する信念を社会の特質とされてゐるが、これは古代の社会制度に対する尊敬と古代制度の持続に対する信頼であつて、型的性向の復古的の性格と共に宿命の性格が可成強く現はれてゐると云へると思ふ。

## 2 文化的特異性

高山岩男氏著『文化類型学』の「支那文化の類型」の節によれば支那は元來一つの世界であつて文化の支配的傳統と独自の様式をもつとし、これを五項目に分けて説明されてゐる。

イ 政治的文化 支那は多くの民族を包含しまた國家の興亡は絶えず行はれた。個人は自分自身に生き民族から離れた個人となる外なかつた。かゝる個人からなる世界の統一は政治の力によらなければならぬ。文化も同様に個人を單位

とすると同時に政治的性格を帯びざるを得ない。法律は個人間の連絡をとる一般的な法律であると同時にその規制するものは個人の慾望や実利である。この一見対立する生活態度が直接に結びつく所に支那文化の特性がある。即ち實際的政治的性格が支那文化の基本的性格であるとされる。かくて支那の学問は畢竟するに治國平天下の道を講じ、政治の實際技術に結びつく実学を越えず、從つて歴史が重んぜられ、尸史が政治の鑑とせられ、また学問は科擧の手段とせへせられるに至つた。文化の側から見れば文化は常に道德的理性的なものとしてられ、政治の理想は覇道よりも王道に求められたのである。されば支那においては『政治が及ぶ限りが天下であり、文化が及ぶ限りが政治である』と説かれる。

ロ 神話の缺乏 神話は宗教的な祭儀を基礎とし、これに宗教的理論的な統一を與へることによつて成立するのであるが、支那にあつては神話の素材に道德的政治的な意義を與へ、神話とはならなかつた。この現世主義は宗教にも現はれ深い意味での宗教は存せなかつたのである。道教によつて代表せらるゝ如き不老長寿を求め神仙を理想とし、現世的肉慾的快樂を無限に永續せしめる宗

教が存した。かく文那の文化は神話を缺ぐが、これに相当するものは天の観念と陰陽、五行の観念があると述べられる。

ハ、天の観念 支那は古代より敬天の観念があり、天を祀る祭儀を有したが、天は人格的のものでなく、人間の意思には無関係に運行する天体であり、自然必然的のものであつた。そして天を祀るのは天子の特権であり、国家の主権者である天子は天の名代、天意の代行者と考へた所に天の観念の政治的 성격が伺はれる。儒教哲学はこの理性的な自然必然を哲学的思辨の綜合によつて發展させたもので、孔子によれば天は倫理的な神聖を有し永遠普遍性を有した。この客観的な自然としての天のほかには主観的な内省の天を認め、たが支那の文化の精神は常に天中心主義で天と心の同一性も疑人主義よりは寧ろ擬天主義に向つた。

この反人間中心主義は支那文化の精神でこの心は支那の芸術に滲透してゐる。一面極めて現実的功利的な支那の世界には他面反人間中心主義的な文化的理想が支配してゐる。こゝに支那文化の類型的特性があるとされる。

二、形式主義 天の観念と共に神話に代はり支那古代の文化を支配したものは陰陽と五行の観念である。両者は基本的構造が同一であつたため後には合流

して強く文那文化を支配した。陰陽も五行も共に天地自然の現象を支配する非人格的な原理を人間社会に支配する原理と平行乃至同一とし、更にこの原理を人間生活の規範とする。自然の理法が人事社会の秩序であり、自然法に従ひ人為を棄てること即ち天人の合一がその道徳である。これは支那の思想の殆んど凡てに通ずる基本特徴であるとされる。陰陽五行の観念はこの天人中心の心と同時に形式的な心をもつてゐる。『それらは凡て限定的な道を説く。道は凡て限定的なものである。否、限定的なものにして眞の道である。』こゝに支那の形式主義が成立し、煩雑な禮教を説く支那精神は畢竟これと同一の根源から成立する。老子は自然主義の立場から形式主義を排けるが、『反形式主義の心は未だ形式主義に促はれてゐる。反形式主義は形式主義的な支那精神の痕子である。』とされる。

ホ、理性と神話意識との交錯 天及陰陽五行の観念を通じて支那思想に理性的合理主義が強く支配してゐることを見たが、その理性的合理主義は神話の否定から生誕した哲学ではなく、神話の代りをなしたに外ならない。それ故に支那の理性的合理主義は同時に常に前理性的、前合理的な要素が含まれてゐる。

こゝに支那思想の特性として理性と神話意識の交錯と云ふ事實を見出し得ると思ふ。『佛敎を媒介することによつて極めて思弁的な哲学思索に達した宋の儒學に於てもなほこの特性を脱し得なかつたのである』とされる。

支那の文化、思想の特異性に關する高山岩男子の説を可成詳しく引用したがこれを『現実の處理に關心を持つ型的傾向』の見透しから次の如く纏められたいであらうか。

支那の社会は現実社会の實際的處理に關心を集中し、その興味は人と人との現実生活の關係を離れず、社会生活は政治に終始した。文化はすべて政治に発足し、政治に歸着した。政治はその現実處理の據点を求め、これを具體的な人為に無關係な自然必然に見出しまたこのありのままの天地及天地間に存在するものをそのまゝ前理性的信仰的に受け容れることにより政治の權威を獲得した。この具體的超批判的な天の法則の詳細を陰陽、五行は信仰的前提の置換へ組合せの展開によつて機械的な組織を發展させ、極めて型式的となつた。學問もまたこの自然的天の觀念を哲學的に説明することに終り、外面的形式的な關聯を精密に思索することであつた。こゝに支那文化における型的傾向の宿命の

性格及それより派生する形式主義を見るのである。この宿命的に興へられた自然法則の範圍内に於て如何に現実を離れた空想の世界はなく、神話は發達せなかつた。従つて文化の価値は現世的實用性の如何によつて評價され、文化は前述の如く形式的となりそれによつて実用的能率を高めるものとした。こゝに型的傾向の實用的性格を伺ひ得るのである。

復古的性格については述べられてゐないが宿命的信仰的自然は人為を排し、ありのままの自然に戻る天人合一を理想とし、文化學問はその實用性を強調し、歴史を重んじこれを政治の鑑とするところあるはその復古的性格を伺ひに充分であると思ふ。

かく觀て來るならば高山岩男子の説かれる支那文化の特異性は型的傾向の現はれとして統合され、同氏の述べられる支那思想の相反する性格の現実的な結びつきが型的傾向から見透してその一体統一的關係にあることを伺ひ得られると思ふ。同氏は相反する支那の性格として文化の個人的と政治性、法律の實利的と一般理性的、思想の現実功利的と反人間中心的、前理性的神話意識と理性等をあげられてゐる。このうち文化の政治性、法律の一般理性的、思想の反人

同中心的、前理性的神話意識は宿命性格の現はれでありその範囲内で如何に現実生活を處理するかとの為には個人的、実利的、現実功利的となり、その為には理性を用ひるのである。即ち宿命的性格が現実處理に感じて現はす型的実用的性格であつて、ともに型的性格に綜合統一して見ることができるのである。

3 民族的特異性 支那民族の心理学的研究は興味深いもので多くの人によつて種々な角度から觀察研究されてゐるが、綜合的な研究として天野利武氏の研究を挙げられると思ふ。同氏は『支那民族性論』(『大陸文化研究』京城帝國大学文化研究会編)において六十余種の文献的資料から支那の民族性を表現する代表的特徴百三十三種を挙げ、これを通觀して支那人は全体的に枯液質的傾向が優勢であると左の如き諸特徴を指摘されてゐる。(各特徴の下に記された数字は夫々の特徴が各種文献中に挙げられた頻度を示す。以下同様)

- 一 勤勉 ..... 17
- 二 忍耐強し ..... 12
- 三 執拗・粘り強い・枯液質 ..... 9
- 四 頑固・頑強・剛性・所信を任ぜしめ難い ..... 7
- 五 無感動・無神経 ..... 18
- 六 同情心なし ..... 11
- 七 忍苦 ..... 4
- 八 遲鈍・緩慢・不活潑 ..... 16
- 九 悠長・暢気 ..... 12
- 十 寛容 ..... 6
- 十一 沈著・慎重 ..... 3
- 十二 堅実・眞摯 ..... 6
- 十三 節制・克己 ..... 6
- 十四 知足・自足・寡慾 ..... 6
- 十五 平和を愛す ..... 17
- 十六 保守的・保守主義 ..... 31
- 十七 消極的・退嬰的 ..... 8

『而してこれ等は枯液質的特徴の代表的なものであるが、その他の殆んど凡てが直接間接に多少とも枯液質的な基礎的性格構造に關係を持たないものはない』とされてゐる。勿論その集められた諸特徴のうちには枯液質的傾向と相反するものがあることを認められてゐる。例へば『怠惰・労働を卑む』『享樂主義的・初的快樂に耽溺する』『誦めがよい・自棄性』などがこれである。この

うち前二者は支那全体から見れば極めて小数の支配者階級に對しては當つてゐるとしても、大多数の農民等に對しては當つてゐない。また諦めがよいと云ふことは支那語の「没法子」から来てゐて日本で云ふ意味とは異り、万策尽きた場合の諦めを意味し、その諦めもまた徹底してゐると説明されてゐる。かくて支那人のうちには枯液質でない者もあるか全体として枯液質であると結論されてゐる。

天野利武氏の説明によつて検討蒐集された支那民族性の諸特徴が枯液質的性格を表すとして一應統合されるのであるが、この諸特徴を異つた角度より整理して見やうと思ふ。

先づ同氏の表について挙げられた諸特徴の頻度の多いものをその順に配列すると次のやうである。

- 一、保守的、保守主義……………31
- 二、利己的、利己主義、貪慾……………30
- 三、柔弱、臆病……………24
- 四、文弱、尚文卑武……………23

五、体面の尊重……………21

六、嘘をつく、常習的虚言者、不正直……………21

七、打算的実利主義、功利主義……………20

この特徴の頻度が高いと云ふことは必ずしもそれが最も強い性質であるとは言へない。諸特徴の蒐集に使用した文献の著者が地理的乃至は社会的に局限された範圍、階級について觀察をなし、またその判断は觀察者より先入觀念乃至は主観によつて歪められてゐないと保証できないからである。けれども『保守的・保守主義』『利己的、利己主義 貪慾』の特徴が他に較べてその頻度が顯著に高いのはそれが支那人の共へる一般的な印象と云へないであらうか。天野利武氏も言はれる如く或際立つた特徴の一つだけを取りだして、それを基本的な特性と見ることは支那民族性に対する誤解を起すものである。この特出した特徴を現はすに至つた全体的な基礎的構造を了解することが必要であり、この全体の構造から見るときに個々の特徴が了解されると思ふ。

この基本的構造を把握するために天野利武氏が蒐集された資料中から十回以上の頻度をもつ特徴を拾ひ、互に密接に關係する特徴を各々一郡として纏めて

の各群の中心の特異性を見出し、そこに『現実生活の處理に興味をもつ型的性向』がその統一的な見透し、或は基礎構造として適切であるかを考察して思やう。

特異性を中心として各特徴を区分すれば左の通りに纏められるやうである。  
現世的

- 一 享樂主義、物的快樂に耽溺……………14
- 二 嘘をつく、常習的虚言者、不正直……………21
- 三 狡猾老獪……………14
- 四 詐欺陰謀を好む……………14
- 五 猜疑心深し……………14
- 利己的
- 六 利己的、利己主義、貪慾……………30
- 七 打算的、実利主義、功利主義……………20
- 八 卑屈……………13
- 九 金錢に異常な愛着心を持つ、蓄財に熱心……………12

- 十 優れた商才を有す、経済的観念発達す……………11
- 十一 商業道德が進んでゐる……………10
- 十二 勤勉……………17
- 十三 質素儉約、废物利用に巧妙……………17
- 十四 残忍……………17
- 宿命的
- 十五 宿命論的、運命論者、天命に安す……………10
- 十六 科学的精神乏し、科学的好奇心なし……………11
- 十七 迷信的……………11
- 十八 射倖心が強い、賭博好き……………12
- 十九 無感動、無神経……………18
- 二十 同情心なし……………11

- 保守的
- 二十一 保守的、保守主義……………31
- 二十二 体面の尊重……………20

自尊	自尊心強し	10
忍	忍爾強し	12
形式的		
壹	儀礼を重んず、礼儀正しい、過度に鄭重、虚礼	16
共	社交に長ず	10
甚	虚栄心が強い	10
安逸的		
其	平和を愛す	17
凡	文弱、尚文卑武	23
辛	臆病、柔弱	24
世	遅鈍緩慢、不活潑	16
関心の範囲		
壹	個人主義、自主性、保身第一主義	14
壹	同郷同族の觀念強し、地縁血縁に依る結合力強し	13

この支那民族性の諸特徴の中心的特異点即ち現世的、利己的、宿命的、保守的、形式的及安逸的とその関心の範囲を総合的に次の如く述べられると思ふ。『支那民族性の心理的特異性は現世的であり、利己的に勤勉であるがその性格は宿命的保守的性格によつて制約され形式的となり消極的な安逸を愛するのである。そしてその関心の範囲は自分乃至は自分の直接屈する血縁地縁社会に限局されてゐる。』これは型的性向の各性格を表はし、それを支持する資料を提示するものである。また資料となった文献の書かれた時までには支那民族に國家意識がなかつたが或は強くなつたことを明かにするのである。型的性向の復古的性格については明かな特徴として表はれてゐないが、上述の中心的特異性を発展の面から見ればそこに復古的性格の包含されてゐることを知るのである。

前表の区分において或特徴はその解釈の如何によつて他の区分に相入れ得るものがある。例へば『保守的』に分類された「体面の尊重」「自尊心強し」は『形式的』の区分に加へることも出来る。『宿命的』の「無感動、無神経」「同情心なし」は『形式的』の下に収めることが出来る。このことは特異性の区分が不



充分であつたと云ふよりは諸特異性が相互に關係し且つ諸特異性が更に基本的な性向に帰一することを消極的に示すものである。またそれは基本的に統一される可き構造の存在を暗示するものであると云へやう。

この基本的性向を背景として先きに最も頻度の高い特徴として指摘した「保守的」「利己的」を理解するならば、支那民族性の理解に甚だ豊富な暗示性をもつと思ふ。この二つの特徴が支那民族性の特異を端的に示す、云はゞ支那型的性向の結晶の如きものであると見えらるのである。

#### 4 支那性格の統一性

支那社会生活の性向を社会的、文化的、民族的の三特異性に分け、各々に關する文献の主なるものを引用紹介し、それが型的性向の見透しを如何なる程度まで支持するかを検討してきた。それによつて型的性向の具體的表現としての多数の史的資料を加へたのみでなく、型的性向の異なつた面が種々と明かになつた。型的性向は社会に關し、史的停滞性と恒久性を示し、文化的には現世的で空想に乏しく、民族性には保守的利己的として現はれる等はさう主なものである。

ある。それよりも更に重要な収穫は文献に説かれる支那の各種の特異性を型的性向によつて統一的に理解し得ることである。従来から多くの人によつて支那の社会文化、民族性の多様性、複雑性、矛盾性が説かれ、そこに支那の特異性があるとされた。これを型的性向の観点からすれば社会事情の諸特質は互に關聯し、補足的であり、相反する如き特異点はその帰一を見出し、複雑な特性は一統的にその場所を得るのである。支那社会の特質は農業共同体の遺制、父家長制專制、傳統に對する信仰等とされるが、これは共に支那社会の特質の一面を現すものとして相補足し、現実的功利的と同時に反人間中心主義的な文化を一体的に行はしめ、支那人の性格が無感動と思へば享樂的勤勉かと思れば怠惰であり得ることを明かにした。それが一つの世界としての社会状態、一つの歴史に育てられた文化同一人の行動であると型的性向から了解合点できるのである。このことは支那型的性向の特異性を表す、即ち型的性向の統一性をもつてあると言ひ得らる。これを反対側から云へば種々な表現をとる如き基本的な性格である。或は種々な性格を現はすに至つた根本的な性向である。このやうな基本的な性向こそは本研究がその存在を仮定して出発し追求してきたものである。

この課題に對し支那社会は型的性向をもつとの解答は唯一の解答でないかも知れないが一つの解答であると云へやう。

## 五、支那の型的性向の構造

教育事案の面より支那社会生活の基本的性向を求めて古代支那の史実をたゞね、そこに見透しを感得し、これを拓元発展させ、かつ文献による再検討によりその見透しが支持されることを節を追つて考察して来た。そして本研究において追求した課題の解答は『現実の處理に關心をもつ型的性向』であることに到達し、その主垂な風性を明かにして来た。この型的性向の構造全体を組織的に要約して見やう。

社会、文化、民族性の諸特異性を一貫して現はる支那社会生活の基本的性向は『現実の處理に關心をもつ型的性向』である。即ち

- 一、支那社会の生活の仕方は常に現世的であり、現実生活の處理と云ふことに絶えず重大な關心をもつ。
- 二、現実處理の仕方はその基本的構造として型的性向をとる。

三、型的性向は復古的性格を有し、過去の標準によつて制約された生活であり、過去の繰りかへし乃至は現状維持であつて進歩に對しては消極的である。

四、型的性向は宿命的性格を有し、自然及社会の現実具體的の事象を必然のこととし、これを受容し、それに納得する。

五、型的性向は復古的標準、宿命的必然の範囲内において現実生活を最も能率的に處理するために具體的形式を極度に發展利用する功利的実用的性格を有してゐる。

六、型的性向によつて現実生活を處理する關心の範囲は個人乃至は個人の風する血縁地縁關係をいえないのが現在までの事情である。

以上の諸点を型的性向自体の側から見れば、『支那の社会生活の性向は型的である故に現実の處理に興味を持ち、これの處理が復古的、宿命的、実用的となり、その關心の範囲は局限されがちである』と云ふことができる。

この支那の型的性向の支那社会生活に表現した内容より見て社会、文化、民

族の特異性に分け、これを社会生活の閑臥において要約するならば、

一、社会的特異性

- 1 自然及社会の現実を必然のこととして宿命的に受容しそこに現世的消極的な平和を求めた。
- 2 血縁関係、社会階級の生活規範を社会の必然的法則としこれが維持を父家的専制関係に見出した。

- 3 消極的平和の維持永続を現世的に有効に處理するため社会規範を形式化させた。これによつて社会は固定化し社会存続の恒久性を獲得したが社会進歩には停滞性を現はした。

二、文化的特異性、特に教育の特異性

- 1 教育の目的は宿命的社会生活の標準によつて天降りの決定された。
- 2 教育の仕事は宿命的社会の固定な規範の絶対尊奉の訓練をなし、これを次の時代へ反復的に傳達する経団的手段であった。
- 3 教育の価値は消極的平和の維持に對する効果によつて評価され、固定な社会規範の無批判的専守の能率を擧げるために無批判的に形式的な

外面を整へることに専念した。形式的な訓練は機械的となり、機械的な習得は過去の文化の反復乃至は置換へ組合せとなり、社会生活を固定化した。

三、民族的特異性、殊に心理学的特異性

- 1 現実の自然及社会の事象を必然的として無感動にこれを寛容し、宿命的な諦めのうちに安逸的な生活を愛した。
- 2 個人の社会生活は過去の社会規範によつて律せられ、甚だ保守的であり、父家長的専制的規範による社会的な地位を重視し、体面を重んじ自尊心が強くなつた。また保守的の生活の確保の為に儀礼を重んじ甚だ形式的であつた。
- 3 社会生活の宿命的な制約のうちに世間的安逸生活を追求し、物的享樂の獲得にあらゆる手段を尽すが、これは結局に於て自己保心自己の属する血縁地縁社会の利己的打算の興味に集中された。利己的興味は安逸を求め保守的生活によつてそれを得んとした。一度利己的興味は満足されないときは保守、安逸は省みられなかつた。

以上支那の型的性向の社会生活に現はれた特異性を次の如き表によつて端的に表はせると思ふ。

支那の型的性向

現実の處理

復古的性向	保守的	專制的	復古的
	安逸的	必然的	機械的
	利己的	固定的	形式的
			民族的特異性
			社会的特異性
			文化的特異性

この表において何れかの一点をとり、それを中心として全体の特異点を理解しまた他のすべての特異点は或一特異点を説明し全体が統一の構造をなしていることを示し得るやうに排列した。即ち或一特異点は全体をその背景として理

解されることを現さんとしたのである。勿論、特異点を示す用語は「利己的」を中心として代表的なものを採定したのであつて、唯一固定のものではない。中心としてとる特異点によつてはこれを取り巻く用語をその意味の内容系統に於いては同じであるが、異なつた用語で表現した方が適切である場合が多いのである。このことはこの表と前述の要約とを比較対照すれば自ら明かになると思ふ。

この型的性向の各特異点の全体的相関統一の点から見れば支那の型的性向はその各々の特異性及び各特異性の表はす諸特徴が一見種々雑多で複雑な混乱状態にあるが、それは單一構造として相関統一の得てゐるのである。支那と云ふ單一な世界、独自の文化、特異な民族を形成してゐるのである。この混乱が混乱に終始せず、秩序ある構造を形成してゐることは、型的性向が種々雑多の性格、特徴に各々その場所を得させる性質を有することから来るものである。

以上は支那社会生活の形的性向の構造の要約である。それは型的性向一般と云ふやうな性向の類型的規範を確立しやうと企てたのではなく、支那独特の性向

を組織立てたのみである。また支那性向の善悪と云ふ價值判断を試みたのではない。支那がこのやうな性向を持つと言ふ事實を明かにせんと企てたにすぎないのである。

### 六、支那の型的性向と進歩性

支那の社会生活の性向を検討してそれが型的性向を有してゐることを明かにしてきたのであるが、これは現在までの支那の生活の仕方である。厳格な意味では過去に屈することであり、將來に開することではない。支那の型的性向が將來如何に發展し得るかについて考察を進めやう。

支那社会生活の性向とは支那の社会活動の基本的な生活の方法であつて、時代の變遷、文化の發展によつてその表現は異なるがそれを通じて支那社会がとる不変共通な生活態度である。それは支那社会において過去と同様に將來にも取られる如き社会生活の仕方であり、それは將來の事情に対して支那社会が如何に行動するかの予測を得させる如きものである。この基本的な性向自体が將來如何に發展し得るかは無意味な矛盾した設問である。支那型的性向自体の發

展とか進歩とか言ふことは考へられない問題である。一應言ふことができる。けれども型的性向の各特異性をその自覚において最も有効に用ひると云ふことは問題となると思ふ。支那は五千年の長い時間と多くの聖賢學者によつて支那社会生活に實現性の可能な生活方法、支那社会の得意とする生活様式が種々試みられ、また社会生活の自然的陶冶によつて模倣されて現在に及んでゐるので、これまでに思ひつかれ或はなされなかつた支那性向の有効な活用はないかも知れない。けれどもそのうちで何れが最も有効な方法であるかの判断、即ち支那型的性向の最も得意とするところの認識を新たにしこれを有意的に強調することはなし得ることである。この得意な方法を確認することが支那性向自体の將來の行き方を指示するものであり、この意味に於て型的性向の將來の發展進歩と云ふことは検討の課題となり得ると思ふ。

個人の生來の身的知的資質はその生活する環境に影響され乍らもその個人独自の生活方法をとる性向氣質があり、その個人に特異な知情的意的な活動をなすことが明かにされつゝあるが、これと同様のことが社会についても言はねると思ふ。この研究の始めに社会の理論的發展に関する筆者の見解において述

へた如く、社会はその成員の總計とは別に実体として具體に對する実体として存するのである。この事實は現代的な意味における國家にあつてその全貌を明確に表すのであるが、それ以前に於ても「世間」と云ふ漠然とした意識以前の姿に於て存するのである。この実体としての社会はその成員の去來とは別にその社会生活自体の組織秩序をもつて存続し、新來の成員に宿命的同化を行ふ如き文化生活を有し、成員の行為を支配する如き社会自体の意識を有し、社会はそれ自体の目的、希望、使命によつて活動するのである。社会生活の組織は個人の身体に相当し、文化は生命に、意識は自我に相当するものであり、社会活動は個人の場合においてと同様にその自然的社会的條件環境の影響を受け乍らもそれ自体の方法によつて生活すると比喩的に云ふことができると思ふ。社会をこのやうに見るならば社会生活の基本的仕方である社会の性向は過去においてと同様に將來に於ても続くものと考へられる。また社会性向はその社会が最も行ひやすい得意とする生活の仕方であるからこれを結果から判断して性向の善悪を定め、これを円満均衡調和等の一般的理想を規準としてその性向を矯正しやうとするならば、その社会の生活を要縮させるのみであらう。この場合性

向に望み得ることはその性向のあらゆる可能な活動の方法を検討し、それを社会生活の進歩発展に最も有効に誘導することであらう。その社会の独自性を發揮せしめ乍らよりよい社会への進展を思索工夫することである。

社会の進展に社会性向を誘導すると云ふことには先づ社会の進歩発展とは何であるかが基本問題である。これを現実具体的に定めることは多くの特殊事情を含んでゐて容易ではないが、理論的一般的に云へば最初の節において述べた理想世界の國家への進展である。理想世界の國家は一層の進歩を継続し、その速度を速め、それを具体的に表現する如き國家であると思ふ。この社会の進歩発展の理論的理想を受け入れられるものとし、その前提において支那社会性向の進歩性を考察してみやう。

社会はその成員によつて創造された文化を具體的客觀的の姿或は文化財としてそれを保持し、これは社会の客觀的生命とも云ふ可き形において存続し、その社会の成員の超批判的な絶対服従を要求するのである。人は自ら送扱したのでなく偶然的な事情によつて或特定の社会に生を受け、その社会の文化を宿命的に授與されるのであり、またそれによつて社会の客觀的使命を維持し得るの

である。社会のもつこの保存的宿命的性質は社会生活の進歩に對しては反復的安定的であることを知るのである。そして個人が創造した文化を社会が保存保持せしめるのであつて社会の進歩はその成員の創造性に依存してゐることになる。個人は社会によつてその社会の持つ文化の水準にまで引き上げられるのであるが、この水準を一步前進さすのは個人の創造性によるのである。創造による水準の引揚げは優秀な特定の個人によつて招來されることもありまた多くの個人の顕著でない創造性の凝結によつて誰とはなく、いつとはなしに行はれることがある。いづれにしても社会の進歩は個人の創造性を基本として行はれるのである。

社会の進展が個人の創造性を契機として行はれることを認めるとすれば、支那の社会的性向の進歩的活動と云ふことは、支那の個人の創造性の検討を要するのである。支那人の身体的技能、性來り能力は他の文明國の個人のそれと較べて大差ないと見てよいと思はれるが、その活動の方法に於て型的性向を有してゐることは既に述べた通りである。型的性向は外面的形式的のことに興味を示し進展と云ふことは具體的事実の増大と云ふ意味にとられるのである。津

田左右吉氏が言はれる如く「支那人の考へ方は事物をそのまま觀念の聯合によつてその間に外面的關係をつけるところに特色がある」。「支那人が弁論を好み言語を遊ぶを好むものであること、字句の仕方が記誦的であり、古典の文字の解釈が主となつてゐることは通俗的な意義でも直観的なものと見方をするといふのとは遙かに違つた態度である」と云へる。「支那思想と日本」(田原貞)にて創造的とはすでに存する事実を組合せ置かへることであり、その優秀卓越性はその配合の形式の優秀さ、その組織の精密雄大さを意味するのである。これを心理的に云へば自我の発達は固定し、その固定した自我の慾望を満す如く外的な事情を組織立てることである。支那人が利己的と云はれるのはこの自我の固定に外ならない。深い意味での宗教的信仰は發展せず、現世的物質的享樂、不老長壽の仙境を理想とし、また自我の関心の範圍は自己保身或は近親知己以上に發展せなかつたことから、自我の固定を知るのである。そしてこの固定した自我或は利己心は、故意になされるのでなく無意識的である。利己的と考へず、外的事実及び社会に處して行く自己の發展を具體的結果においてのみ理解するのである。財物、社会的地位を自我であるかの如く考へ、所有の増加、地位

の獲得を自己の發展向上と同意義にすら考へられてゐる。寛容な態度の「大人」が些細な財物の所有に異常な関心を示すと云はれるのはその間の消息を語るものであらう。そしてその財物地位等を自己を賭してもと云ふのでなく、その獲得が困難となれば自己の保身を消極的にこれに適應するのである。固定せる利己心をあくまで固定せんとするのであり、しかもそれを意識せずまた当然のこととして行はれるのである。

この利己心が固定的であり、それを意識せないといふことが、支那の獨創性創造性を宿命的な範囲内における工夫に終らしめ、生活を形式的にならしめたと思ふ。発生的に見れば固定した利己心が據点となつて社会生活の傾向を形成したと云へる。かくて墨子は利己心を據点として兼愛をとき社会安定の実現性を得んとし、また孔子は「己欲立而立人、己達而達人」と教へたのではなからうか。老子が無に徹して見た素朴な自然的血縁事實は血縁に固定した利己心であつて社会生活を消極的安定的に直進せしめたものではなからうか。そして今日まで支那社会は継続したが停滞的事情にあつたことは支那の歴史に於て試みられた幾多の處世済国の理論経論及その實際がこの固定した利己心によつて阻ま

れ、それを進展することが出来なかつたことを想像させるのである。これは固定せる利己心自体に直接に働きかけ、その自覺と進歩を得ることは徒勞であることを明かにすると思ふ。換言すればそれは支那の傾向に逆行することになるからである。

支那型的傾向の固定性に進歩性を缺へる如き他の方法として手掛りになることはそれが具体的形式的な活動に興味をもつと云ふことである。社会の經濟的政治的の制度組織の具体的外面的な変革によつて型的傾向に進歩性を缺へられないであらうか。勿論社会自身の性質が前に述べた如く保守的維持的ではあるが、それを制衡して即ち社会の條件と環境を支配して型的傾向に進歩性を缺へる可能性が考へられる。かくて韓非子は親々の道でなく法律の形式的な尊奉を要求し、外部的な嚴罰をもつてこれが実施に臨んだと見ることが出来る。ところがその結果は支配者階級の利己的慾望を満す道具となり、法律は淺薄な実用的價値を得るに止まつた。また時勢に應じて法律を変更して一國の現状を整へることはできたとしても、一嚆の進歩を促す如き進歩性はできず、現実には法律は独裁的專制の道具を提供することになつた。即ち制度組織は支配者階級の



固定せる利己心を動かすには至らねばならぬのである。また独裁的専制政治を採  
中山の主張したる民主主義は如く民本的身制度に変更しても支那民衆の固定した  
利己心を満足する途に終ると想像される。固定せる利己心の満足と支配階級から  
民衆に移したる過度なる利己心の範囲を広くせむかも知れないが、そこに進歩  
性を残せる途は覚束ないと思ふ。これは社会の性質が本来保守的であること  
と支那型的性向が固定性を有することとが結合して齎らした事情であると云へる。  
支那型支那型社会自身が外部的制御に由るる進歩性を得ることの困難であるに  
よるを知るべきである。……  
斯くて支那の固定せる利己心はそれ自体直接にもまた外部的からも、それに  
進歩性を失へ得ないことを知るのである。そして固定した利己心が無意識的状  
態にあることがその中心的困難である。支那型的性向はあつては固定した利己  
心が無意識のうちには主観的價値判断の標準となつてゐるのであるが、これを客  
観的に取扱ふものとして科学的態度が考へられる。それは文化の一部門として  
の科学は特は自然科学によつて型的性向に進歩性を賦へられぬかを考察して  
見やう。支那型的性向の具体的形式的性格が客観的研究を貴ぶ科学に恥はしい

ものでないかと思はせるものがある。  
秋山修三氏によれば支那には自然科学が存してゐたが、発達せなかつたと考  
へる。支那の天文学は早くより行はれ大陰曆を使用されたが西洋科学の影響を  
受けるまで科学は一直線に発達せず、むしろ陰陽八卦説、五行説、九星説に見  
られるやうな百術的迷信的諸要素と強く結ばれた。また早くから算木の計算法  
使用さる。後代には算盤の算法も普及し、又那独特の発展をなしたが、その  
使用する道算はまた同時に一層高度な数学の発展進歩の桎梏となつた。そして  
この等の困難は記号による西洋数学の影響を受けるまで打破されなかつた。ま  
た数学は天文学測量術と結合し、物理學とは結合せなかつた。これは支那  
科学が自ら地球の神に對して到着せなかつたことと知られざる説かれてゐる。  
支那の西洋哲学史は……  
は具體的天に對する前理性的な信仰、自然必然に對する宿命的な考へ方のため  
に自然現象を客観的乃至は唯物的に徹底した研究をなすことを躊躇させたによ  
ると思へる。その宿命的範圍内において甚だ純理論的な組織と優秀な工夫とが  
なされただが、その前理性的宿命的信仰のためは迷信と結合したためにはなかつた

考へる。また数学は具體的計算法を手段として使用し、それに依存した、その発展に一定の限度があつたと考へられるのは秋山氏の言はれる通りである。換言すれば支那はその型的性向のために自然科学を發展し得なかつたのである。そして支那は具體的客観的のことに興味をもつが、その興味は固定した利己心を満足さすか如き條件を備へたもの限り、それ以上に事物の真相を確かめることには進まなかつた。現世の安定的直接處理に役立つもの以上には関心を示さないのである。西洋の科学数学が紹介されてもこれが研究は甚だ徐々であつたと云はれるのは社会の現実處理に要求される部分だけを取入れこれ以上に社会を進歩さすことには関心が掃はれなかつたと云へやう。

以上の考察を要約すれば支那型的性向に進歩性を映へるものとして或は固定せる利己心を内部的、外部的に動かすものとして道德宗教は無能であり、政治的経済的組織の变革では不充分であり、科学的文化の導入は利己心を満足さす材料の増加に終るのである。支那型的性向の進歩發展を個人、社会、文化の各方面から試みたが結局意識せぬ固定した利己心の満足と云ふことによつて阻まれ、その進歩性を獲得できないのである。

かくの如く支那型的性向のある一面を主位に置き、それによつて進歩性を得られないとすれば、そこに残されたことは型的性向全体としての特異性によるの外ないと思ふ。すでに述べた如く型的性向は外部的具體的形式なもの、種々雑多にその所を得させ、全体として一見混乱状態にあり乍らそこに自からなる統一、存在を得さすと云ふ特質をもち、その統一の契機となるものは固定せる利己心である。この全体としての特質を高調して生活を行ふと云ふことは、支那の傳統を強化する一方に他方に於て外国の文化文明を盛んに取り入れ、體的、実用的、現世的文明文化を増大し、その取捨は固定せる利己心によつて判断しかつ統一して行くことである。文明文化の増大は或程度以上に急激であることは固定による社会の安定を破ること、型的性向には行ひ難いことであり、また性向上これを行はない方がよい。それは全体的な實際的効果によつてその程度を計りつゝ、その増大を計るのである。それによつて支那社会は恒久性持続性を犠牲にすることなしに現在の文明国に較べてその停滞性或は立ち遅れを緩和できると思ふ。

この生活の方法は支那型的性向に無理のない、行ひ易い、得意な生活の仕方

である。支那がその長い歴史において、多岐の異なつた民族と文化を受容しながら「底なし田」の如くそれをまゝ併呑し、これを際限なく行ひ得る如き根強い生活力を示したことは、この混沌的統一とでも云ふべき型の性向全体の特質の現れであると思ふ。これは支那が企てなくてもその性向上自然に成起することであるが、これを積極的に意識して行ふことによつて支那社会の発展性が得られると思ふ。一言にして云へば利己心は固定しながらこれを満足さすやうな條件、事情、我物を増大して具体的外形的に文明国になることである。これを支那自身の側から云へば支那の発展進歩を計ることである。即ち支那型の性向は固定した利己心を意識せないのであるからそこに発展進歩と云へば具体的外形的の増大を意味するのである。

このやうにしてともかく他の文明国と肩をならべて進み得る如き外形を具へ、これを増大してゐるうちに他の国家が進展し國家意識が明確になり、また國家の關係が地域世界的人類世界的では神の目的へと拡大し國家間の密接の度を加へる、それに従つて支那の社会はその発展する國際事情を社会的環境としてこれに順応し下ら自らの社会を處理して行く。即ち支那の社会生活は自ら進歩

性をとらんとすれば常に固定せる利己心に阻まれるのであるから進展する他の國家を社会環境としこれに歩調を整へて進むことが支那型の性向に行ひやすい仕方であるからである。かくて支那は所謂混沌的統一による発展をなし支那独特の存続と進展を可能ならしめると思ふのである。

これに因縁して支那の良き隣邦としての日本のなし得ることは日本の優れた文明文化を借しみなく支那社会に移植することである。

それと同時に支那の國際的環境として日本が自主的に高度な國家に進むことである。それを教育的な言葉で言へば日本が優れた國家となり、支那を感化することである。感化と云ふことは支那の教育を通じて特に孔子によつて唱へられたことでありまた孔子の思想が今日まで支那の少なくとも支配者階級の中心思想であることと思ひあはずならば國際關係においても意味あることと思ふ。この場合に日本の自主的進展の可能及その様式の如何は慎重な考慮を要する問題であること云ふまでもない。これについての検討は他日に譲り今は支那社会についての検討してこれを述べ大方の御指導を仰ぐ次第である。

昭和十六年九月五日印刷  
昭和十六年九月十日發行

(非賣品)

著者兼  
發行者

同志社東亞研究所々員  
吉川哲太郎

京都市上京区寺町通今出川下ル

印刷所

文

雅

堂

頁	一	六	八	一六	一七	一九	二〇	四五	〃	四八
行	八	五	八	三	一五	五	一	五	二	七
誤	理解への	奥体具体	指摘するに	郡	周書康誥篇	同	拡大	でもあり	理解	余経済生活
正	理解へ	奥体、具体	指摘するのに	群	周書康誥篇	同	拡大	であり	理論	余経済生活
頁	五九	六五	〃	六九	七三	七五	七七		八四	
行	一五	九	二	二	五	一五	三		七	
誤	一郡	享樂的勤勉	型的傾向の統一性	現世的	撰撰	客観的的使命	社会的進歩はその成 實の創造性に依存 せしめるのであつて		我物	
正	一群	享樂的、勤勉	型的傾向は統一性	現世的	撰撰	客観的の生命	削除		我物	